許

延 山 四 季

武 田 海 正

春木川水音絶えて蟬の聲 霧深く天女をまもる影嚮石

◆秋の夜と鈴虫の音とともしひと

我吹き居りしい

Æ

= カ の 香に いつしかに見は共々に歌ひ居

Ø

夏

春

秋 雪ふみてひとり ぬかつく御草庵 袈裟掛の松よりみゆる久遠 寺

懐かしの友へ春秋八年を憶ひて

この

歌短

近詠數首

杣に來合せし人の緣かな

秀

孝

夕陽

あわく落ちて行

山のあなたを眺むれば

何時も悲しきもの懐ひ

石

井 綠 線

◆午睡よりさめてみつむる電氣カバーに

◇姿見の前に立ち居て妹は 蠅二三匹戯れ はくゑみて居りさも嬉しげに お n

うせに

し友を思はれて

君とうたひし春の唄 若草萠える野にふして

◆瀧に打たれ祈る人ありしふきさへ 我に來りてかなしみを持つ つめたく思ふ今日此頃に

◆寥しさはいつ來たるらむ山 尾花亂れて秋風そ吹く

べの

想

中 뽇

小

樹